

2016年度
小田原市立病院 第7回 市民公開講座
がんを知ろう！ 早期発見から治療まで

抗がん剤とは

2016年10月1日
おだわら市民交流センター

産婦人科 丸山 康世

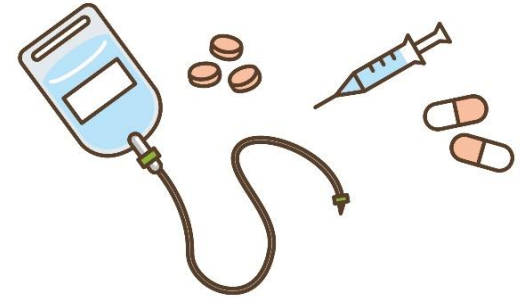


薬物療法（抗がん剤治療）のを知る



- ・がんが増えるのを抑えたり、成長を遅らせたり、転移や再発を防いだり、小さながんで転移しているかもしれないところを治療します
- ・手術や放射線は、がんに対しての局所的な治療ですが、抗がん剤は、より広い範囲に治療の効果が及ぶことを期待します
- ・抗がん剤単独で治療を行うこともあれば、手術治療や放射線治療などのほかの治療と組み合わせて抗がん剤治療を行うこともあります（集学的治療）

抗がん剤の種類



- 化学療法: 化学物質によってがんの増殖を抑え、がん細胞を破壊します
- 分子標的治療: がん細胞だけが持つ特徴を分子レベルでとらえ、それを標的にした薬である「分子標的薬」を用います
- ホルモン療法(内分泌療法): がん細胞の増殖にかかわる体内のホルモンを調節して、がん細胞が増えるのを抑える「ホルモン剤」を用います

実際の治療の方法



- がんの種類、広がり、病期、ほかに行う治療や、患者さんの病状などを考慮して検討されます。
- 注射や点滴による化学療法の場合、“治療の日”と“治療を行わない日”を組み合わせた1～2週間程度の周期を設定して治療を行います。この周期になる期間を「1コース」「1クール」などの単位で数え、一連の治療として数回繰り返して行われるのが一般的です。
- 途中で効果や副作用の様子を見ながら継続します。副作用が強く出た場合には、量を調整したり、治療を休止あるいは中止することもあります。副作用を抑える治療を組み合わせたり、副作用に対する治療を併用しながら、治療を進めていきます。

抗がん剤の副作用



- 化学療法は、活発に増殖する細胞に対して治療効果を及ぼします。
- このため、がん細胞だけでなく、皮膚や腸管、骨髄、毛根の細胞など、細胞が分裂したり増殖することで機能を維持している組織や器官に副次的に影響が起こります。
- これを、がん細胞に対する治療効果という「主作用」に対して「副作用」と呼んでいます。



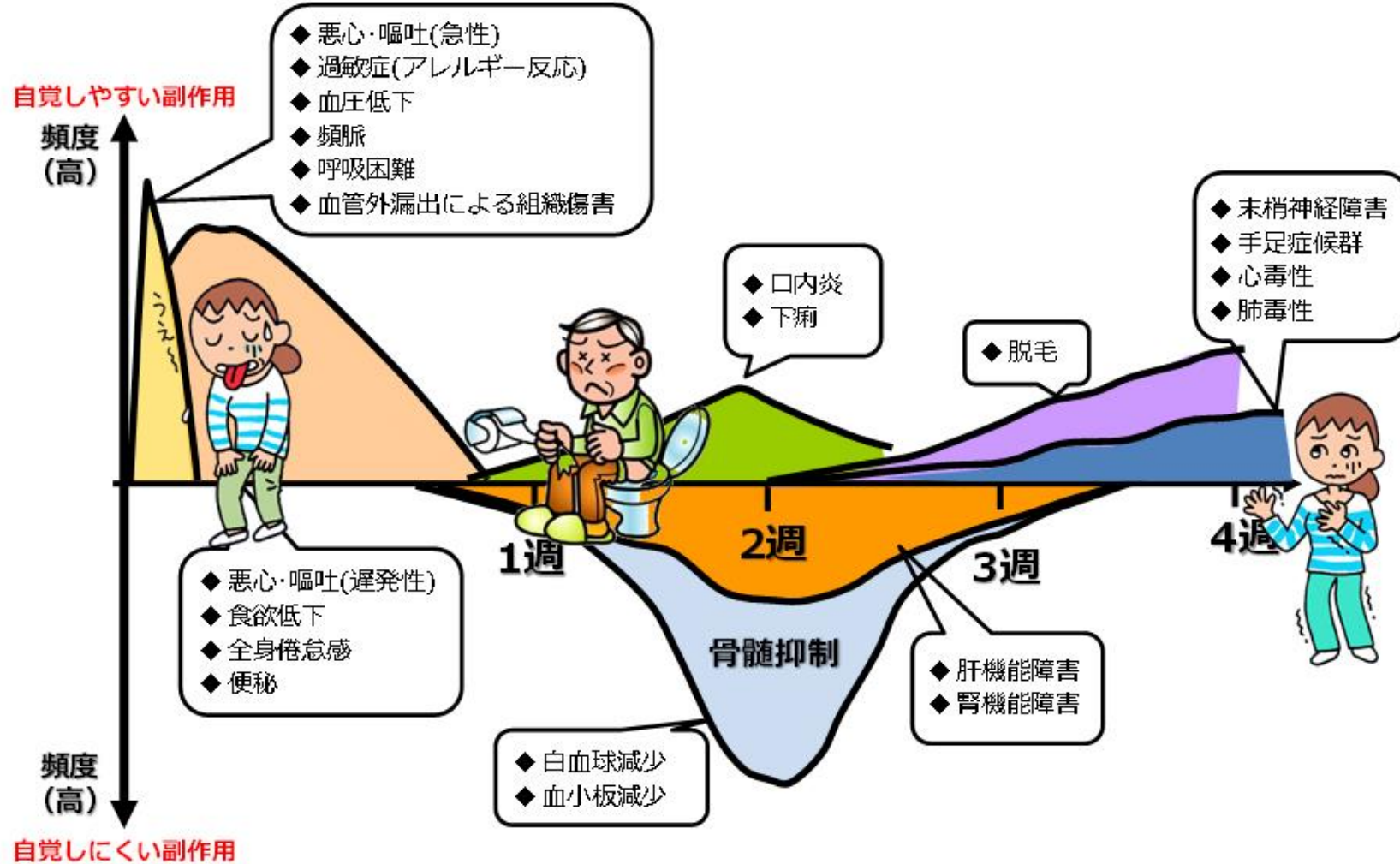
副作用の実際



- 化学療法の影響によって、血液細胞が減ったり、口腔(こうくう:口の中)や胃腸の粘膜の再生が起こりにくくなったり、髪の毛や爪が伸びなくなったり、感染しやすくなったり、貧血、吐き気、口内炎、脱毛などの症状が現れたりします。
- 起こり方や起こりやすさは使用する抗がん剤や量、期間によって異なります。種類によっては、心臓、腎臓などや、生殖の機能に影響が出ることもあります。



副作用の現れやすい時期



副作用への対策



- ・副作用の起こり方
 - ・吐き気、だるさ、食欲低下、下痢、手足のしびれなどの自覚症状
 - ・肝臓・腎臓・骨髄への影響といった検査でわかる障害
 - ・起こる時期も、治療後数日以内、1～2週間後、1ヵ月以上後などさまざま
- ・化学療法による副作用
 - ・つらい症状を薬剤で抑える
 - ・生活上の工夫で症状を軽くする
 - ・化学療法中に高熱を伴って、白血球のうち感染防御の働きを持つ好中球の減少を認めるときは必ず治療が必要です
 - ・予想される副作用を担当医から聞いておくことは大切です

